

【芸術は生活の質である】

大正新教育運動と『赤い鳥』のかかわりのように、新しい教育は、芸術運動から力を得、またともに歩んできていました。北原白秋は、「ゆりかごのうた」などを子ども向けに創作するだけでなく、芸術教育の力リキュラムまで提案していました。

近年の日生連の実践でも、子どもたちの内面の成長を真ん中にした自画像や友だちの顔を描く実践、また合唱の実践などがあります。『生活教育』の表紙は、素敵な絵が載せられてきています（三月までは小学生の描いた絵でした）。

しかし芸術分野が弱くなっている問題もあり、夏の研究集会では、音楽分科会があるものの、美術（芸術）分科会は、一九六一年以降なかなか開くことができていません。

今の教育委員会の方針はおおむね、①学力向上 ②体力向上 ③しつけや社会的ルール、の三本柱で、学校のなかでもいつそう〈芸術・文化〉がすみに追いやられ、うるおいがなくなってきました。

生活教育 キーワード

生活教育では、このようにとりたてられた分野や領域としての芸術を再生しようとしながらも、「芸術は生活の質である」と考えています。人生が彩りや深みを持ち豊かに輝くとき、世界が違って見えるとき、理想が想像できるとき、苦しみのただ中で希望が見えるとき、誰かを理會できたとき、人々が一体となっていることが感じられるとき、……私たちは芸術とともに生きていくのです。

詩歌、演劇、書、画、絵、音楽、花、茶、庭……芸術は日常生活のひとこまひとこまを彩り深くしています。子どもの日々の生活が豊かになることが生活教育なのですから、どの実践でも、どの分科会でもその視点で見たとき、芸術教育になっています。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① デューイ（栗田修訳）『経験としての芸術』晃洋書房、二〇一〇年（原著一九三四年）
- ② 安田章生『日本の芸術論（新版）』東京創元社、一九七二年（初版五七年）